

はじめに

ヘボン博士の記念講演を明治学院同窓会から依頼され、大変光栄に思っています。じつは昨年NHKのラジオ第2放送ですが、「カルチャーラジオ歴史再発見」という番組で、9月末からクリスマスまで13回「ヘボンさんと日本開化」という番組に出演し、ヘボン博士を新しい視点から説明してまいりました。その結果、リスナーから「事実を淡々と語るので分かり易い」、「先祖がヘボンさんの往診を受けた」、「宣教師って意外と大変だね」という感想をもらいました。私たち明治学院の学祖は、その多様な働きから多くの人びとの共感を受けていることが改めて痛感しました。

さて、ラジオの話をいただいたとき、どのようにヘボン博士を伝えるか、この点をまず考えました。ご承知のとおり、同時代人W.グリフィスのヘボン伝や、高谷道男先生の研究では、ヘボン博士の崇高な人格や卓越した業績から「君子ヘボン」、「聖人ヘボン」の評価が付きまといまいます。明治学院大学キリスト教研究所を中心とした新しい研究では、むしろ「人間ヘボン」に焦点をあて、ヘボン博士の苦悩と栄光を描いたものが精力的に発表されています。私は、最新の成果を取りこみながら、「人間ヘボン」を説明することによって、ヘボン博士をより私たちの方へ、近づけようと試みました。

スコッチ・アイリッシュ

ヘボン博士の熱心な信仰のルーツについて話しましょう。プリンストン大学飛び級入学、ペンシルヴァニア大学医学校卒業の宣教医師という経歴からヘボン博士は、富裕なアメリカのプロテスタント長老教会信徒であると言えます。ヘボン家がアメリカに移住したのは、独立前の1773年のことです。曾祖父サミュエルは、スコットランド出身ですが、カトリックの島アイルランドに移住し、アイルランドを経由してからアメリカに渡りました。このようなアイルランド経由のスコットランド人のことを「スコッチ・アイリッシュ」または「アルスター・スコッチ」と呼んでいます。スコットランドでは宗教改革により、長老教会が国教会となりましたが、長老教会信徒でも熱心な「カヴァナナター」といわれる人びとは、カトリックのアイルランドに、アングリカンのイングランドに長老教会の国教会を樹立することを夢見ていました。ヘボン家の熱心な信仰のルーツは、このように信仰熱心な「スコッチ・アイリッシュ」に求められます。これはまた、アメリカ合衆国のプロテスタント・キリスト教を特色づけることにもなりました。国際連盟を提唱したウッドロー・ウィルソンは第28代目の大統領に当たりますが、それ以前にスコッチ・アイリッシュは10人もの大統領を輩出しています。この信仰の伝統がヘボン博士をして、東洋伝道、日本伝道に駆り立てたのです。

ヘボン塾

一昨年明治学院は、そのルーツであるヘボン塾から数えて、創設150周年を祝いました。この年、不思議なことに一枚のセピア色に焼けたヘボン塾の写真がインターネット・オークションに出品されました。現在は落札者の好意により横浜開港資料館に寄贈されています。それは、創設10年を経たと思われる頃の日曜学校の生徒たちの集合写真です。真ん中のテーブルに聖書を置き、その傍らにクララ夫人が立ち、正装をした60余名の生徒や関係者が両脇を固めています。文献を読むと、「クララ夫人の学校」という文字は目にしますが、その姿を目の当たりにしたのは初めてです。偶然とはいえ、創立150周年の記念すべき年に出現したことに学院長として戦慄を覚えました。1863（文久）3年のヘボン塾創設時の最初の生徒は林董（はやし・ただす）です。順天堂の創設者佐藤泰然の末子で、後に駐英公使、外務大臣になりました。横濱のアメリカ人商館やアメリカ公使館員ヒコから英語を学んでも身に着かず、なぜかヘボン塾で英語を身に着けたといひます。クララ夫人やヘボン博士はこの14歳の少年を「サン」（息子）と呼び、可愛がりました。その後入塾した生徒に、当時まだ13歳でしたが、後に大蔵大臣、総理大臣を歴任し、軍事予算を削減したために2.26事件で軍部の凶弾に斃れた高橋是清がいます。林が駐英ロンドン公使のとき、是清は日銀副総裁として、日露戦争の戦費調達のため起債のためにロンドンに赴きます。是清は、ユダヤ人商人の協力もあり、起債に成功します。ヘボン塾出身のこの2人がヘボン塾仕込みの英語を駆使して、日本の危機を救済したといっても過言ではありません。

ヘボン博士の苦悩

1905年、そのロンドンからの帰路、是清は、病気で入信しているクララ夫人を見舞うために、ヘボン博士夫妻が引退生活を送っているニュージャージー州イースト・オレンジに立ち寄りました。しかし、是清も、同じく見舞いにいった明治学院第2代総理井深梶之助もクララ夫人に直接会うことが出来ませんでした。井深総理は、その英文日記にこのように記しています。”Poor Dr.Hepburn.His wife lost her mind is in an asylum only son is not Christian”. ヘボン博士は、2つの苦悩に苛まされていました。ヘボン博士は、5回子どもを亡くしています。最初は、結婚後、東洋伝道にむかう小さな捕鯨船での流産、2度目は滞在したシンガポールで生後間もない男の子、そして、東洋伝道を諦めてニューヨークで開業していた時に流行病で相次いで亡くした3人の男子の幼児です。唯一成人したのがアモイで生まれたサムエルという男の子でした。しかし、来日の折、高等教育を受けさせるために14歳の息子サムエルをアメリカに置いてきました。その間に生まれた父子の溝は、生涯埋まることはなかったのです。サムエルは折角入学したプリンストン大学を中退し、クリスチャンになるわけではなく、日本においてビジネスマンとして活躍しました。ヘボン博士は、最初は息子を宣教師にしたいと期待したのですが、やがて信仰がないから成績が悪いのだと考えるようになりました。他方、サムエルは父の関心はもっぱらキリスト教と学問にあったと述べています。

またクララ夫人とは、66年間一心同体でしたが、夫人は、辞典の編集、聖書の翻訳、医療奉仕に明け暮れる博士を支えながら、家庭はもちろん、ヘボン塾を切り盛りする多忙さです。やがて日本において、神経痛やリュウマチを患うようになり、帰国後10年にして、精神錯乱に襲われました。おそらく博士は、そのような夫人の姿を弟子である是清や井深梶之助に見せたくなかったのではないのでしょうか。

おわりに—苦難の中で—

クララの入院後、ヘボン博士は週に2回夫人を見舞うことが日課になりました。その悲しみを博士はこう述べています。「私は愛する妻を思って大きな悲しみの中にいます。私が行くたびにとても嬉しそうな顔をして、どうして家に連れて帰ってくれないのかと不思議がるのです」。現在、死生学という学問が発展しております。死をタブー視する現代人の心のありようが問われているのです。現代人は、家族や親しい隣人、そしてペットの死により、喪失感に苛まされ、孤独を味わい、必要以上の精神的苦痛に襲われているのです。ヘボン博士は、クララの病状悪化による死に対して、どのような態度をとったのでしょうか。ヘボン家の家訓に「信仰に堅く立て」(keep traist)という言葉があります。博士は、姪の娘さんに宛てた手紙でこう述べています。「真の幸福とは、神が私たちのなかに生きており、神とともに生きる希望のうちにあるのです」。死に対する心構えは、生の価値を絶えず問い直すことにあります。絶対者に対するヘボン博士の変わらぬ信仰に学んでいきたいものです。